

令和6年度 会派調査研究報告書

(視察先1箇所につき1枚)

会 派 名	新生会		
事 業 名	先進地視察	ルーバンフラノ構想	事業について
事 業 区 分	①研究研修	②調 査	

1 上田市での課題と研修・調査の目的

当市においても人口減少、少子高齢化が急速に進み街の賑わいが遠のきつつある現状で、特に中心市街地では郊外でチェーンストアによる大型店舗の進出などを背景に商店の空き店舗が増えるなど拍車がかかってきた。近年、中心市街地活性化の施策展開によって地域に密接なお店の収益に寄与する、幅広い年代層が新たにリノベーションを加え、新規出店が見られてきているが、更なる活性化へは一層の民間活力の応用が求められており、地元経営者らが主体で行政との役割が明確な富良野市で先進事例となる公民連携の取り組みを学びに視察に伺った。

2 実施概要

実施日時	視察先	北海道 富良野市
令和 6 年 8 月 9 日 (金) 9 : 30 ~ 11 : 00	担当部局	建設水道 部 都市建築 課 課長 黒崎幸裕氏
報告内容	1 市の概要	富良野市は、総人口 19,695 人、財政力指数 0.35、自主財源比率 30.0%、上川総合振興局管内の南部に位置し、東西約 32.8 km、南北約 27.3 km で北海道のほぼ中心にあり富良野盆地の中心都市である。総面積は、600.71 km ² で、東方に十勝岳連峰の富良野岳(1,912m)、西方に夕張山地の芦別岳(1,726 m)がそびえ、南方には東京大学演習林(227.16 km ²)があり、市域の約 7 割を山林が占める自然環境にある。
	2 市の特徴	札幌市や帯広市までは約 2 時間と主要都市にアクセスしやすい。北海道の中心に位置し、「へその街」として呼ばれ、由来するへそ祭りが行事として行われている。富良野盆地は内陸性気候が特徴で、1 日の気温差、年間を通しての気温差も大きく、冬は-30℃を越すこともあり、夏は反対に 30 度を越えることも数日ある。昼夜の寒暖差が激しい気候のため「キングルビー」や「ルピアレッド」など、糖度が高くみずみずしいメロンが収穫されている。また、紫の絨毯を広げたようなラベンダー畑と勇壮な十勝岳の風景が有名で道内他市に並びワインのまち、スキーのまちとしても知られ、映画のロケ地としてその名を全国に広げた。

報 告 内 容	<p>3 視察事項について</p> <p>「ルーバン富良野の構想について」 中心市街地活性化計画に基づくコンセプトである。</p> <p>①経済のパイの拡大 「まちなかにぎわい空間」の創出で観光客を取りこみ、まちを活性化 大手を入れずに地域企業が中心で雇用の促進に。</p> <p>②富良野流コンパクトシティ(集約されたまちづくり) 歩いて暮らせる利便性と機能性に富んだ、魅力的な中心市街地づくり。 富良野市では公共交通網が駅に集約されるように設計されており、その特徴を活かし、 街を回遊する交流人口を取り込む仕組みをつくった。 この二つが構想の2大テーマであり、モットーは稼げる街づくり(ここが公民連携を行なった 元である。)</p> <p>1) 名称 ルーラル(田舎)とアーバン(都会)を掛け合わせた造語である。自分たちで作り 上げていく都会の魅力と田園の魅力を併せ持つちよっとおしゃれな田舎町を意味している。</p> <p>(2) 構想の背景 当初は平成14～21年に始まった中心市街地である富良野駅前の区画整備による駅前 開発が発端となり、商業施設再編が起こり、49あった商店に大きく影響し、従来あった商店 街の一つが消えてしまい、街の賑わいが遠のいてしまう要因となり、行政が行う整備事業 に限界を感じた出来事が始まりである。 地元経営者らは、このまま行政にまちづくりを任せておけないという不信感が渦巻く中、駅 前に立地していた大型病院の移転が決まり、2,000坪に渡る跡地の利用が大きな課題とな る。 その頃、市は区画整備におけるによる支出、国による三位一体の改革が行われ財源が不 足していた。 そこで地元経営者ら自らが立ち上がりまちづくりを進めていくことを決めた。 まず、行政にTMO(中心市街地活性化計画)をたてるよう要請した。上記の国による改革で 民間の活用が見込まれない場合計画自体が認められない状況でもあったため、市も資本 金を一定程度出資し、経営者ら民間が主体のまちづくり会社(第三セクター)の創設を行 い、収益面での事業運営を委託し市は計画策定、ランニングコストとなる補助金の申請等 の後方支援を行う役割分担で取り組むこととした。 そして「経済パイの拡大」「まちなかに人を誘う拠点づくり」「交流人口の取り込み、回遊に資 する施設の整備」を掲げたフラノマルシェ構想を立ち上げ、大型病院跡地に拠点となる経 産省補助金の補助金の活用、まちづくり会社の役員が出資を行い市は持ち出しをせず、拠 点を設置し平成23年に運用が始まった。</p>
------------------	---

(3)富良野市の公民連携の形

・市街地活性化に向けた役割分担「民が主役のまちづくり」

まちづくり会社(ふらのまちづくり(株)資本金 3850 万円)が収益事業の主体である
富良野市は、ランニングコストに対する支援(補助金等)※会社設立時は 100 万円出資、
フラノマルシェの土地は市の所有である。

商工会議所は商品開発等の支援をまちづくり会社へ行い、新規創業者の増加、空き店舗
の解消、会員の増加等の課題解決ができる関係を構築しており、ソフト事業での補助金等
の獲得にも動いていて行政からは地域消費拡大に対する支援(補助金等)を受け運営に共
助している。

※各セクションが連携し、地域内循環ができる体制が確立されている。

(4)役割分担した体制と拠点

1)まちづくり会社を中心市街地活性化の推進母体(行政で中心では難しい稼ぐことに重
点)

- ・まちづくりをサステイナブルなものにするためには、収益推進母体が収益を上げることが
必須条件である。
- ・都市再生推進法人として公的性格を有し、国の補助金や制度資金の受け皿となり事業
主体となりまちづくりを進めていく。
- ・複合施設のオーナーとなりリーシング収入や売り上げマージン収入などで収益を上げ
ながら中心市街地の更なる活性化事業に再投資し、市街地整備を公民連携で連鎖的に
実施していく。

「積極的なリスクテイクで TMO から公益ディベロッパーへと進化、まちづくり会社主導によ
る中心市街地の複合的更新を行う」

「市街地のエリアマネジメントを通じてまちづくりをビジネスに転換＝稼ぐまちづくりの推
進」

2)稼ぐエンジンとしてのフラノマルシェ

・キーワードは、食と観光客と情報発信。商業的に成功し永続的な経営が可能な施設

1)コンセプト

- ・まず何よりも市民が地元の食文化を楽しむ空間として享受できる「市民の憩いの場」で
ある。
- ・富良野の農と食の魅力を内外に発信し、観光客や日々交流者をまちなかへといざなう
「おもてなしの拠点である。
- ・集う人々に様々な情報をまちの情報を提供し、まちなか回遊へと繋ぐ「まちの情報発信基
地」である。
- ・市民、商業者、観光客が自由に集い交流の輪を広げられる「まちの縁側」である。

視察目的でも示した深刻な人口減少により、中心市街地の賑わいの減少、大型店舗の撤退等による空き店舗の増加を背景に従来の行政によるまちづくりでは限界に至っていることは共通できる大きな課題であり、民間力の活用で賑わいの創出(地域活性化、インバウンドの増加)を実現することができた富良野市の公民連携は大変参考になるものであった。市所有のフラノマルシェの土地貸借を手頃に行うことで一時的な補助金ありきでない、永続的な支援を行い、市も持ち出しがないという点は財政状況が厳しい中、有効的な手法と感じた。行政が仕掛けたわけではないが民間の動きに即応し、役割を明確にした公民連携と行政サイドのキーマンとなる存在が現在の形に影響していたことが見られ、そこから生まれる連鎖するまちづくりへの仕組み、市民アンケートと合わせた各役割での考えも活かした施策展開に行政担当課の熱量を感じられた。

当市においてもまちづくり会社が上田市中心市街地活性化基本計画に基づく事業推進のため設立をされており、計画の必須構成員である。フラノマルシェを使った市外からの新規参入の企業支援は一から店舗をつくって集客を行うハードルを下げられ、運営の教授を受けられる、市も施設内に公共の空間と合わせたゾーニングによる経済効果が生まれている。このような環境の整備には富良野市で担当課、商工会議所、まちづくり会社が週1回顔を合わせた会議が行われている点を参考に、まずはキーパーソンとなる各セクションの担当者らが顔を合わせる機会を設け、課題の洗い出し、まちづくりへの互いのビジョンを共有し、空き店舗の有効活用等それぞれの役割から見出していくことが重要ではないかと考える。

また、持続可能なまちづくりへ向けたキーとなる人材育成も見据えた組織。人の循環形成も併せて行なっていくことが大切である。

富良野市での公民連携の手法を参考に引き続き、当市における地域が賑わう、稼げるまちづくりの実現に向けた民間力の活用を提案していきたい。



* 視察先の写真等がある場合は添付のこと



感想(まとめ)・市政に活かせること